

「文章構成」を中心とした「書くこと」の指導

①指導要領では、「書くこと」の指導事項として次の5つの事項をあげている。

○課題設定や取材に関する指導事項	○構成に関する指導事項
○記述に関する指導事項	○推敲に関する指導事項
○交流に関する指導事項	

この5つの指導事項の中でも特に、「構成に関する指導事項」を中心にすえ、3年間を通して継続的に「読む力」「書く力」の育成を図っている。

ア 「文章構成」を基本に考えるわけ

論説・説明的な文章を読んだり書いたりする場合、その基本となるのは文章構成だと考えている。文章構成は、家を建てる場合の設計図であるといえる。設計図を見れば、それがどんな家になるか予想がつく。一方「書かれた文章」は「家」にあたる。しかし、作者の設計図は示されていない。つまり、書かれた文章から作者の設計図を読む（理解する）ことが、論説・説明的な文章を「正確に理解する」上での基本となると考える。正確に読み文章構成を理解できれば、「正確に書く」ことにもつながる。そこで、論説・説明的な文章を「読む」場合も「書く」場合も「文章構成」を中心に据えて指導している。「読むこと」と「書くこと」の関連として、学習過程に生徒が書いた文章を、生徒間で相互評価する「学び合いの場」を位置付けることにより、他の4つの事項も十分指導していけると考えている。

しかし、これは1つの考え方であり、構成に関する指導事項を中心に据えなければいけないと考えているわけではない。要は、指導者が幹となる指導に関する考えを持ち、他の事項もバランスよく取り入れていけるかである。

イ 書くことにおける学習内容

【三段構成で文章を書くこと】

文章構成にはいろいろあるように思われるが、ほとんどの文章は三段構成として読み取れる。実際、教科書に採られている論説・説明的な文章の構成をみても、ほとんどが大きな文章構成として見れば、三段構成である。三段構成とは、書かれた文章を「家」に例えれば、「土台」「骨組み」「屋根」といった家を支える3つの大切な要素に当たる。そこで、教科書の論説・説明的な文章は、基本的に三段構成を基本として読むように指導している。また、読んだことを「書くこと」に活かす場合も、三段構成で文章が書けるよう指導している。四段構成（起承転結）の文章もあるという考えもあると思うが、この場合も以下に示す「本論」の部分が「承・転」に分かれていると考えられる。「三段構成」とは、『前書き・本論・まとめ』の三段からなる文章構成をさすが、各段の内容について説明する。

前書き・・・視点をしぼる。（何について書こうとしているのかその視点を絞り、読者の興味関心を高める。）

※テーマに沿った文章を書く場合、作者が最も工夫するのが前書きである。どんな視点から、テーマに迫ろうとするのかを示す。前書きが平凡だと、読み手は興味が持てないし、次の

本論の内容が生きてこない。文章を書く場合、前書きの意味を理解させ、しっかりした前書きが書けるようになるには、かなりの繰り返しによる指導が必要である。

本論・・・具体例をあげる。(前書きでしぼった視点についての具体例をあげる。(漠然とした例ではなく、自分の経験や体験に基づいた、前書きでしぼった視点に沿った、生き生きとした例をあげられるかがポイントとなる。文章の量もこの本論で調節する。)

※本論では、前書きでしぼった視点に沿って、具体例をあげる。その具体例がいい文章の条件となる。自分の生き生きとした体験などがこの本論で示されると、読み手に与える印象も強い。字数制限がある場合も、本論での具体例を幾つあげるか。どの程度詳しく書くかで調節する。三段構成で文章を書く場合、前書きでの視点の絞り方と、本論での具体例の上げ方が、とても重要である。「視点と具体例の関係」を理解させ、視点に沿った効果的な具体例が書けるようになるには、書いた文章を文章構成から見直し、課題を見付けて次につなげる繰り返しの指導が必要である。

まとめ・・・全体をまとめる。(前書きでしぼった視点を、深め、広げ全体をまとめる。書き慣れれば「まとめ」はさして難しくはない。)

※まとめは、前書き・本論の全体内容をまとめることである。ポイントは、前書きで示した視点を、「広げ・深め」全体をまとめることである。一見難しそうだが、前書き・本論の構成がしっかり理解して書けていれば、さして難しくはない。

【字数・時間の制約の中で書くこと】

決められたテーマに沿った文章を、「三段構成・400字・30分以内で書ける」ことを書くことにおける基本目標にしている。入試における課題作文の条件をみても400字・30分程度を字数・時間の基本的な条件としている場合が多い。生徒は書き慣れてくると400字20分で書けるようになる。

ウ 基礎的・基本的な知識・技能

書くことにおける、基礎的・基本的な知識・技能として、自分や友だちが書いた文章を、三段構成と言う視点で説明できること。また提示されたテーマに即して、三段構成・400字・30分以内で文章が書けることの2点をあげる。

ウ 学び合いを通して学習を深める

学習では、現在の自分の力を他者との交流を通して向上させていくことが大切である。書くことにおける学習でも、他者との交流(学び合い)を通して、書く力を向上させるような学習の場を、学習過程に設定することが重要である。

三段構成で文章を書くことについての知識・理解が深まると、学び合い学習において、友達の書いた作文を三段構成という視点で相互評価できるようになる。自分が書いた作文を3人～4人のグループで読み合い相互評価し、「視点のしぼり方」や「具体例のあげ方」につ

いて、友達からのアドバイスをうけ、さらに自分の作文を推敲して、よりレベルの高い作品へ仕上げているようになる。仕上げた作品は、できればコンクールなどに応募してみる。入賞すれば書いた本人はもとより、生徒全体の自信にもなり、学習意欲の高まりにもつながる。構成に関する指導事項を理解させ、学習過程に学び合いの学習の場を位置付けることにより、書くことの他の4つの指導事項もバランスよく指導できると考える。

② 実践例 「読むこと」と「書くこと」の関連について

次の作文は、光村図書1年、第4単元「魚を育てる森」の学習の一環として書いた作文である。「環境の大切さを訴えた作文」（論説文）を書いて、環境作文に応募したものである。「読むこと」と「書くこと」の関連を図り、「学び合い場」を設定して仕上げた作品である。1年生ということもあり「学び合いの場」は不十分なものであった。しかし、中には、文章構成についても深く理解し、レベルの高い作文を書く生徒もいる。

ア 入賞した生徒作品より学ぶ。三段構成の書き方

次の作文は、「かけがえのない地球を大切に」作文コンクールにおいて、最優秀賞を受賞した生徒作品である。この文章を基に、「三段構成で文章を書くこと」、及び「読むことについての関連」について具体的に説明したい。

イ 「命の住む川」（環境作文） 1年 生徒作品

【前書き】

夏。我が家の田んぼには、たくさんの蛍が飛んでいる。電気がなくても周囲がはっきり見えるほど明るい。ところが何年か前の我が家の田んぼには、蛍は一匹もいなかった。だが、さらにその数年前には、今よりもはるかに多い蛍が住んでいたのだそうだ。何故、我が家の蛍は減少し、また戻ってきたのだろうか。

【本論】

我が家では、何年か前から強い農薬や殺虫剤を大量に使っていた。蛍が減ってきたのはそのころからだ。減少しているといっても、徐々に減っていくので、私たち家族は蛍の減少に気づかなかった。そして、何年かたったある日、蛍が全くいなくなってしまったことに気づいた。

私たち家族は後悔した。何故蛍がいなくなってしまうまで気づかなかったのだろう。そして、私たち家族は考えた末に、農薬のせいだという結論にたどりつき、①農薬や殺虫剤の量をへらす。②使う回数を減らす。③弱いものへと切り替える。という対策を考え実践した。

始めたころは、量や農薬の強さの加減がわからなくて苦労をしたが、私たち家族は、「蛍を守りたい。昔の美しい自然に戻りたい。そして、未来に残したい。」という思いがあり、農薬を取り扱っているお店の方に聞いたり、インターネットを利用したりして、農薬の量や強さを工夫した。

量や強さを変えるという工夫を始めて数年たったころ、何年か前に田んぼからいなくなってしまった蛍が、また、我が家の田んぼに戻ってきた。いなくなる前よりも蛍の数は少な

くなってしまったが、それでも、我が家の蛍は戻ってきた。

蛍が戻り始めてきたころ、田んぼの周りの川にも変化が起きた。蛍と同じころにいなくなってしまった沢ガニやドジョウが戻ってきたのだ。強い農薬を使っていたころは濁っていた水も、すっかり澄んでいて、川の底が見えるほどになっていた。

私がこの体験を通して気づいたことは、私たちが今まで使っていた農薬は、蛍やドジョウの住む水を汚し、結果、生き物の住めない環境を作ってしまうということ。

【まとめ】

我が家では、蛍の減少によって気づき、農薬は殺虫剤を弱いものにしたり、量を減らしたりする。という我が家なりの工夫で蛍やドジョウの住める川に回復させることができた。他にも、ポイ捨てをしない、花を植えるなどの工夫で水はまた生き物の住める美しい姿を取り戻すことができる。

私は蛍やドジョウの住むことのできる川を残したい。川を、水を守るためにも、生き物の命を守るためにも、小さな工夫をしていくことが大事なのではないだろうか。

ウ 三段構成より見た内容説明及び「読むこと」との関係

「命の住む川」を三段構成として読み取る

【前書き】についての説明

前書きでは（視点をしぼる）ことが大切である。この作文の場合には、環境問題を論ずる視点として「蛍」を選び、さらに「数の変化」を示し、「蛍の数の変化がどうして起こったのか」と疑問を投げかけることにより、一層視点をしぼりこみ、読者の興味関心を高める工夫がなされている。

この環境作文は、教科書教材「魚を育てる森」を学習した後の発展学習としての「書くこと」の学習として設定した。「魚を育てる森」は、次のような書き出しで始まる。

『北海道襟裳岬。北海道を背骨のように南北に走る日高山脈の先端が、沖合数キロメートルまで海藻のしげる岩礁となって太平洋に延びている。緑の丘の上には白い灯台が建ち、浜辺には見渡す限りクロマツの針葉樹林が続いている。

ところが五十年前、この辺りは「襟裳砂漠」と呼ばれていた。どこまで行っても草木のいない砂漠と砂山であり、風速十メートルをこえる風はその砂が飛ばされて、目も開けられないほどであったという。だが、そのさらに昔、江戸時代までのここは、カシワ、ナラ、シラカバなどの広葉樹が生いしげる大森林地帯だった。

いったいなぜ、広葉樹林帯が「砂漠」と化し、今はクロマツの針葉樹林帯となっているのだろうか。』

生徒は、時に指導者の予想をこえた次元で「学ぶ」ことがある。「学ぶ」は「まねぶ」（まねる）を語源とするという。この作文を書いた生徒は、教科書の「魚を育てる森」の作者の書き方（視点のしぼりかた）を自分の作文に応用したのである。「読む」で、「学んだ」ことを、「書くこと」に応用したと言える。

【本論】についての説明

本論では、しぼられた視点に沿っての具体例をあげる。この作文の場合は、「蛍の数の変化」についての、具体例をあげることになる。ここで大切なことは、その具体例が漠然としていないことである。できれば「蛍の数の変化」に自分がどのように関わったのか、その具体的な体験をあげられれば、説得力が増す。この作文の場合には、この本論部分が、自分の体験として具体的かつ生き生きと書かれている。前書きでしぼられた「視点」と、本論における「具体例の関係」を、いかにわかりやすく具体的に書けるかがポイントとなる。文章の大半を占める本論部分であるが、多くの生徒が、前書きと本論の関係のとらえ方があいまいである。この関係を理解して文章が書けるようになるためには、機会あるごとに生徒が書いた作文を評価し、そのよい点・改善点を確認していく実践が必要である。

【まとめ】についての説明

まとめは、視点を広げ・深めて全体をまとめる部分である。一見難しそうだが、書き慣れてくればさほど困難なことではない。この作文の場合は、ポイ捨てや花を植えるなどで視点を広げ、最後の2行で視点を深めて、全体を結んでいる。この作文の場合は、環境の大切さを説いた環境作文（論説文）であるから、まとめ部分の内容はほぼ決まっている（環境の大切さや自然を守っていこうといった内容となる。）と言ってもよい。文章を書くとは、自分勝手な意見や感想を書くことではない。自分の意見や感想がより多くの人に認められる必要がある。中学生として、読み手を意識した文章が書けるようになることが必要である。

エ 実践のまとめ

「書くこと」の指導において、「三段構成で文章を書く」を中心に実践してきた。「書くこと」だけでなく、「話すこと・聞くこと」「読むこと」においても、その指導の核となる部分を指導者がおさえていると、生徒にとって成果のあがる学習になるという実感をもつ。国語の教科書をもても、非常に単純な構成である。例えばどの学年も、現代文の単元構成は、文学的文章と論説・説明的な文章の繰り返しであり、その中に1単元古典が含まれているという単元構成である。単純な中に奥深さが秘められているといえる。単純な単元構成を成す三領域の奥にある「核」（基礎・基本）の部分をつかんで、繰り返しの学習と学び合いの学習の場を学習過程に取り入れることにより、指導要領で示された目標に近づけるのではないかと考えている。